

長岡郡 地域記録集 土佐の村々1 高知県長岡郡大豊町立川地区

立川上名村 立川下名村

〈その二〉番外篇 — 六集落の地域遺産 —



刈谷



一の瀬

三谷

仁尾ヶ内



中央



人々

々が実感をもつて生きる地域単位を主題として地域記録集は、第一号で長岡郡立川上名村・立川下名村をとりあげた。現代の行政区分ではなく、敢えて「江戸時代の村」を単位として始まった調査であったが、村の生活の中で機能しているのは、更に小さな村の中の小村であり、江戸時代に編まれた地誌類に登場する各村内の地名がこれと一致していることに気づくのに、そう時間は掛からなかった。

小さな谷筋ごとに暮らしを紡ぐ。同じ集落内でも、向かいの谷筋の神社には行ったことがないという古老の証言は、人が生きていくことは、実にきめ細かな作業の連続であることを思い起こさせた。

今後も、地域記録集は江戸時代の村単位を基本として編集していくが、住民の生活に密着した究極の地域単位を改めて確認しておこうと試みたのが、立川番外篇ともいえる本号である。

編集後記

峻険な山々に囲まれた立川という小世界。清らかな渓谷や静寂な山間のなかで、営々と積み重ねられた歴史を肌で感じ続けた三年間であった。

ある村人の「遅かった。もう少し早く来てくれたらよかった。」の言葉が印象に残る。この十数年の間に、主を失った家、祭が途絶えた神社が年々増え、村の歴史をつぶさに知る古老たちは急速に減ってしまったという。

とはいえ、改めて村の各所に分け入ってみると、誰もが知っている「立川」に加え、身近であるがゆえに、いつの間にか振り向かれなくなった、思いがけない歴史を見出すこともしばしばであった。村はまだ歴史に裏打ちされた様々な可能性を秘めている。

私たちと村の人たちが再確認した立川の記録(番外篇)をおとどけする。

企画員 筒井聡史



地域記録集 土佐の村々1 高知県長岡郡大豊町立川地区

長岡郡 立川上名村・立川下名村
〈その二〉番外篇
— 六集落の地域遺産 —

発行 平成28年(2016)3月31日
編集者 土佐山内家宝物資料館
渡部 淳(館長)
横山和弘(企画課長)
富井 優(学芸員)
筒井聡史(企画員)
デザイン タケムラデザインアンドプランニング

※各集落の人口と世帯数は平成28年3月1日時点の数値(大豊町役場 人口世帯集計表より) ※各集落のホノギ図は大豊町教育委員会提供の地籍図より作成 ※本冊子の地形図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである(承認番号 平28情復、第38号)。

仁尾ヶ内



立川の北西部に位置する。立川上名に属し、北は愛媛県、西は本山町に接する。他の集落と比べ200メートル程度標高が高く、毎年30センチ程の積雪を見る。

仁尾ヶ内の集落は、立川川を境に北部の「ヒノチ」(本村ともいう)と南部の「カゲチ」に分かれる。二つの小村とも山の斜面に家々が点在し、現在14戸21人が暮らしている。

往時、この地の人々は林業に従事する「山師」が多かった。集落の西方に位置する「官山」(国有林地帯)は、江戸時代は土佐藩の御留山であった。



観音堂
正面・側面ともに1間の宝形造。室町時代や聖観音立像(江戸時代)や棟札が伝わる。年に一度お祭りを行う。



黒王神社
仁尾ヶ内の氏神。江戸時代後期の宮床は2代(約40m)。鳥居近くには文政5年(1822)に仁尾ヶ内村惣中が寄進した常夜灯が建つ。



白石山と工石山と白山神社

大豊町と本山町に連なる工石山(標高約1516m)の山頂には白山神社が鎮座。神鏡が安置されている。現在毎年旧暦6月18日にお祭りを行っている。



工石山頂上の「ゆらぎ石」と山々 ▶
かつてゴトゴトと揺れたという伝承が残る「ゆらぎ石」。眼下には仁尾ヶ内山国有林が広がる。



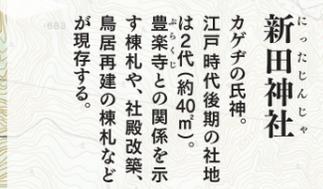
大豊町

集会所

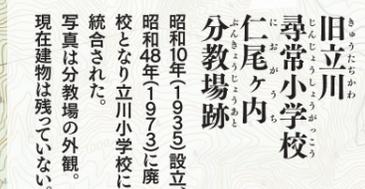
ヒノチ

カゲチ

至刈谷→



新田神社
カゲチの氏神。江戸時代後期の社地は2代(約40m)。豊楽寺との関係を示す棟札や、社殿改築、鳥居再建の棟札などが現存する。



旧立川尋常小学校
仁尾ヶ内分教場跡
昭和10年(1935)設立、昭和48年(1973)に廃校となり立川小学校に統合された。写真は分教場の外観。現在建物は残っていない。



立川川源流
第一の標札
第一から第三までの標札が存在する。



アケボノツツジ
5月ごろ、見頃を迎える。



直径17.5cm、総厚5.5cmの室町時代の鰐口。銘には「伊予国新居郡角村於天浄[]」「応永廿二年七月吉日大願主[]」とあり、応永22年(1415)に、現在の愛媛県新居浜市角野付近で制作されたことが知られる。立川にもたらされた経緯については未詳である。
画像:大豊町教育委員会

観音堂の鰐口



木造聖観音立像
観音堂の本尊で、江戸時代の作。檜の一本造で彩色が施されている。像高39.3cm。

仁尾ヶ内の文化財

仁尾ヶ内では、観音堂・黒王神社・新田神社、そして工石山の山頂にある白山神社等に文化財が伝わる。観音堂の鰐口は、高知県内でも数少ない室町時代の作で、隣国伊予国(愛媛県)からもたらされた物である。国境に位置する立川の地域性がその来歴にも反映されている。一方、幕末に木地師が奉納した黒王神社の木器類は、素朴な作りの中に、山間を移動しながら生活していたであろう彼らの



姿を彷彿とさせてくれる。さて、立川地区の御堂や神社には数多くの棟札が伝わっており、この地区の文化的な特色の一つとなっている。

仁尾ヶ内でも観音堂以下に多くの棟札が伝わる。黒王神社に伝わる宝暦5年(1755)の神社新建立棟札は、本願主本山氏(上名庄屋本山家の関係者と思われる)を筆頭に、仁尾ヶ内の年寄、五人組頭、そして仁尾ヶ内の惣氏子中が納めたものである。神社建立にあたり村人たちが込めた様々な願いが、時を越え、棟札の形となって今に伝わっている。

新田神社の棟札

享保3年(1718)、豊楽寺の賢普が導師を勤め、新田大明神宮の再興を祈願した際のもの。(写真は表・裏)



白山神社の神鏡

「藤原光永」の銘があるが、制作年代は未詳。



黒王神社の木器類
幕末に木地師小椋氏が奉納したものなど、江戸から大正までの木器類が伝わる。仁尾ヶ内には「キジャドコ」という字名も残る。

黒王神社の棟札
社殿改修・屋根葺き・鳥居再建など、江戸から平成までの各時代の棟札が伝わる。



仁尾ヶ内の主な文化財

- 鑄銅製鰐口 室町時代 応永22年(1415) / 観音堂
- 木造聖観音立像 江戸時代 / 観音堂
- 観世音菩薩尊像再興棟札 江戸時代 宝永7年(1710) / 観音堂
- 金龍大明神宮諸願成就所棟札 江戸時代 寛永16年(1639) / 黒王神社
- 木造狛犬 江戸時代 文化8年(1811) / 黒王神社
- 木地師奉納木器類 江戸時代 嘉永6年(1853) / 黒王神社
- 新田大明神宮再興棟札 江戸時代 享保3年(1718) / 新田神社
- 鳥居建立奉納木札 明治時代 明治9年(1876) / 白山神社

トビックス 白山神社のまつり

旧暦の6月18日、工石山の山頂に鎮座する白山神社の例祭が行われる。祭日当日は、住民と神職は早朝に集落を出発し、登山口まで約40分車を走らせ、さらに40分ほど山を登って神社に向かわなければならない。近年では、関係者の高齢化により山頂での祭りが困難になったため、登山口に分祀された神社で祈禱が行われ、その後、集落の有志数名が山頂の本宮へお供え物を持って登るようになってきた。

昭和の中頃までは車道は無く、前日に集落を出発し登山口近くの「ツヤデン」という経由地へ一泊してから登っていた。当時は他の集落や本山町からも多くの人が参拝に訪れていて、祭りの世話人は、いち早く山頂に登り、ゆらぎ石の上で参拝者をもてなしていたという。



林業に携わる小笠原徳孝区長(59)によると、かつて村の山師は、尻皮を尻に敷いてノコギリで木を切り、切り出した材木を立川川に流して運んでいたという。山の仕事は今より多種の作業があり、人手も多く必要だった。そのため、仁尾ヶ内では女性も含め住人のほとんどが山の仕事をしていた時期があったという。現在、林業は後継者不足と恐れられ、多くの現場で若い世代が活躍している。山の未来に限って言えばそれほど悲観はしていない。

区長の話

山師の村



中和

Chuwa



仁 尾ヶ内の東隣に位置する。立川上名に属し、東は刈谷、南は中央に接する。

集落の東部で、仁尾ヶ内より流れる立川川と、刈谷より流れる川奥谷川(藤川)が合流する。立川川上流の「中の村」と下流の「和田」をあわせて中和という集落が形成されており、現在20戸32人が暮らしている。

中和は、中世の山城跡や江戸時代に人や物資の往来を管理した上名番所跡があり、現在は立川で唯一の郵便局が設置されるなど、立川上名における重要な地域であることが分かる。

地蔵堂の木造薬師如来坐像



鎌倉時代の作。像高62cm、檜の一木造で顔面ならびに体部に漆箔が施されている。右手をまげて掌を前に立て、左手はまげて膝の上において掌を上にする。左手掌には薬壺(現在は欠失)を留めてあったと思われる竹釘が残る。

画像:大豊町教育委員会

中和の文化財

中和では、地蔵堂・橋掛神社・八坂神社・多賀神社等に文化財が伝わる。

現在地蔵堂にある木造薬師如来坐像は、もとは東福寺(現在廃寺)にあった仏像と考えられている。江戸中期に編まれた『土佐州郡志』によると、東福寺は地蔵堂と同じ場所所に在り、戦国時代に立川城を拠点にした長越前守の菩提寺であったという。長氏は、本山城(本山町)を拠点にした有力国人領主本山氏の家臣であり、本像の伝来にも本山氏の政治文化圏の広がりが関係しているのかもしれない。伝来の詳細については不明であるが、鎌倉時代の地方仏として出色のものである。

中和の主な文化財

- 木造薬師如来坐像
鎌倉時代 / 地蔵堂
- 石造地蔵菩薩坐像
江戸時代 / 地蔵堂
- 橋掛大明神宮新再興棟札
江戸時代 享保15年(1730) / 橋掛神社
- 橋掛大明神宮本社拝殿建立寄進板書
江戸時代 文化15年(1818) / 橋掛神社
- 橋掛神社神前奉納俳諧連歌板書
大正時代 大正11年(1922) / 橋掛神社
- 祇園宮上葺棟札
江戸時代 文久3年(1863) / 橋掛神社(八坂神社)
- 上名庄屋本山家墓所
江戸時代ほか

上名庄屋本山家墓所

文化11年(1814)、88歳で没している。



江戸時代、上名では本山家が庄屋役を世襲した。小高い丘の上に、18世紀後半以降の墓石が残る。



本山清五右衛門の墓

八坂神社の幕末維新期の棟札



左は弘化2年(1845)の祇園三社建立棟札、中央は文久3年(1863)の祇園宮上葺棟札、右は明治7年(1874)の八坂神社鳥居建立棟札。

橋掛神社の棟札と板書
文化15年(1818)本社・拝殿の建立につき、氏子講中44名の寄進者名を記す(上)。社殿改築・屋根替・鳥居建立など、江戸から昭和までの各時代の棟札が伝わる(下)。



上名と下名の一番地

立川川と川奥谷川の合流部付近、中和と刈谷の家々が接するこの地域には、立川上名と下名の地番の始点がある。地番は、明治初期に始まった土地一筆ごとに番号を付ける制度で、立川では上名と下名をそれぞれ地番区域としている。古老によると、二つの一番地を始点に、上名では中和・仁尾ヶ内、中央一の瀬の順に地番の数が増え、下名では、刈谷、中央、三谷一の瀬の順に数が増え、いくという。地番が付けられた当時、立川の中心地であったこの地域に、一番地を置いたのではないかと推測される。江戸時代、一番地の近辺には各村の庄屋と番所が置かれていた。かつての立川における「公的」な場所を基準として、地番が付けられたのかもしれない。



▲上名・下名の1~3番地をそれぞれ①、②、③で表示
大豊町役場地籍調査班所有の地番図より作成



▲上名一番地の絵図面(明治中期)
「土地一筆限図面 立川上名」(個人蔵)より

区長の話

上名と郷社



立川は、立川川と川奥谷川(※)を境として上名と下名に分かれ、それぞれに郷社がある。上名の郷社は天神宮だが、どういわけか下名地(中央)に建っている。そのため地元では、下名の土地を借りて建つ神社という意味で「コウチノミヤ」(借り地の宮)とも呼ぶ。こう話す宮川利重区長(74)の曾祖父は上名を管轄する神職だったという。天神宮に納められる明治時代の棟札に、その名前を確認することが出来る。

※川奥谷川上流部の河叉橋付近から笹ヶ峰までは尾根筋が境となる

地蔵堂

正面・側面ともに1間の宝形造。中和・刈谷両集落の御堂として、現在年に一度、4月頃にお祭りが行われている。



立川城跡

戦国時代、本山氏家臣の長越前守の居城と伝わる。



大橋の淵

澄みきった水が流れる大橋の淵は、恰好の遊び場となる。



警護屋跡

参勤交代の際、従者が分宿した場所の一つである。江戸参勤の折、藩士たちが領内最後の宿をつたこの場所には、残念ながら建物などは残っていない。



上名村番所跡

設置年代は未詳。上名村庄屋の本山家の居所で、代々道番人を兼任した。高知城下から12里(約47km)に位置する。



橋掛神社

中和の氏神。江戸時代後期の社地は2代3歩(約50m)。本殿近くに、山の神とされる神木がある。1月、5月にお祭りを行う。





刈谷

立 川の北部に位置し立川下名に属す。北は愛媛県、南は中央に接する。

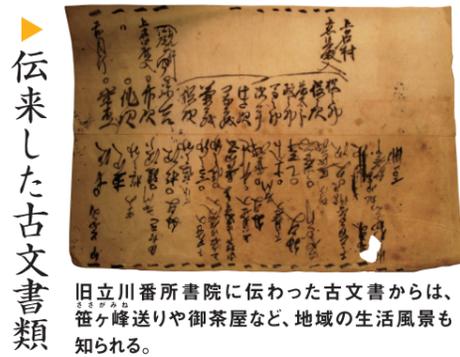
集落のなかで最も人家が集中する「刈屋」と、北部の「川奥」「浦の谷」をあわせて刈谷が形成されている。集落には現在17戸24人が暮らしている。刈谷は江戸時代、参勤交代で藩主が滞在した御殿(番所)があり、土佐と伊予を結ぶ重要な地域であった。交通の要衝であったことから人やモノの移動が頻繁で、昭和時代までは商店や飲食店、宿屋のほか娯楽施設まであったとさう。

●刈谷の文化財

刈谷にある旧立川番所書院(立川御殿)は、立川の歴史性をよく物語っている。古代の丹治川駅設置以来、この地は、「道」と深く関わりながら、歴史を重ねてきた。江戸中期、享保3年(1718)、土佐藩6代藩主山内豊隆が、参勤交代のルートとして、四国山地を縦断する「北山越え」のルートを初めて採用して以来、この街道が幹線道路となっていく。そして、江戸後期、18世紀末に建てられたのが現存する旧番所書院である。この番所書院の存在を別格として、刈谷では、五社王子宮と八坂神社に文化財が伝わっている。五社王子宮にある明治33年(1900)の建立(再建)棟札は地域の災害記録として注目される。棟札裏面には、同32年7月の未曾有の暴風雨の様子が記される。五社王子宮の社殿は風雨の激鋒により破壊されたと記されている。

刈谷の主な文化財

- 旧立川番所書院(重要文化財)
江戸時代 寛政年間/大豊町
- 旧立川番所書院 伝来古文書類
江戸時代ほか/大豊町
- 王子権現宮建立棟札
江戸時代 享保4年(1719)/五社王子宮
- 五社王子権現御神楽新百年祈禱木札
江戸時代 宝暦3年(1753)/五社王子宮
- 鳥居建立寄附者芳名板書
昭和時代 昭和59年(1984)/五社王子宮
- 八坂神社建立棟札
明治時代 明治21年(1888)/八坂神社
- 下名庄屋川井家墓所
江戸時代ほか



旧立川番所書院に伝わった古文書からは、笹ヶ峰送りや御茶屋など、地域の生活風景も知られる。



上段の間
(旧立川番所書院の内)
藩主専用の上段の間には、床と付書院があり、棧の大きい格天井が上部を飾る。

旧立川番所書院

(重要文化財)



この建物は、土佐-伊予国境の警備の番所(関所)と、藩主参勤の土佐国内での最後の本陣(宿所)をあわせてのもので、下名村の番人庄屋川井惣左衛門が、江戸時代後期、寛政年間(1789-1801)に建てたものである。地方における書院建築の貴重な遺構として価値が認められている。

立川御殿が今日の風格ある姿に至るまでには幾多の変遷があった。御殿は、番所としての役目を終えた後、明治5年(1872)に個人の手に渡り一時宿屋となったが、昭和48年(1973)に大豊町が譲り受け、その翌年、国の重要文化財に指定された。昭和56年(1981)からは、老朽化が進んだ建物の基礎や建具などの解体修理工事が開始された。なかでも茅葺屋根の工事は、県内に文化財修復の技術者がおらず、県外から職人を呼んで行われたという。また解体修理に伴い、建物内で発見された古文書などの調査が行われた。その結果、御殿の建築当初の形態が明らかとなり、事業ではその成果に基づいた復元整備工事も行われ、昭和57年(1982)に現在の建物が完成した。御殿は現在般公開されており、多くの見学者が訪れている。



▲修理前の御殿「重要文化財旧立川番所書院保存修理工事報告書」(大豊町、1983年)より



▲平成14年度に行われた屋根葺替工事 画像：大豊町教育委員会

下名庄屋川井家墓所
江戸時代、下名では川井家が庄屋役を世襲した。写真上は、旧立川番所書院を建てたとされる川井惣左衛門の墓。惣左衛門は天保6年(1835)84歳で没した。



五社王子宮の棟札
拝殿屋根替・幣殿正遷宮・鳥居建立など、江戸から昭和までの各時代の棟札が伝わる。

区長の話
~結界札の風習~

旧暦の9月9日、五社王子宮の例祭では、神職より、氏子が各家に持ち帰る札のほかに、集落境や集落内に立てる「結界札」が配られる。村上保利区長は毎年、祭りが終わると村境へ向かい、折柄札を竹に括り付けて立てるといふ。古い札は取り除いても良いし、残していても構わないとのことである。

結果札は、刈谷のほか、中央、三谷、一の瀬で確認できる。仁尾ヶ内と中和でも見られたというが、現在は下名の集落でのみ残る風習のようである。

刈屋遠景
昭和34年(1959)の写真。左側に見える茅葺屋根の建物が旧立川番所書院である。

榜木
土佐と伊予の国境に建てられていた標木で、昭和57年(1982)に復元された。是より北愛媛県へ、従是南土佐国と記されている。

木番所跡
土佐藩領における最後の番所。ここを越えると笹ヶ峰峠、伊予国へと至る。

荷宿跡
参勤交代の際、荷置き場所として使われた荷間屋跡。幕末に坂本龍馬が水戸藩士と面会した場所とされる。

五社王子宮 八坂神社
刈谷の氏神。江戸時代後期の社地は1代4歩(約33㎡)。例祭旧暦9月9日と同じ日に、集落境へ祈禱札を立てる。

旧立川番所書院(下名村番所)
下名村庄屋の川井家が番人役を兼任し、参勤交代の際には藩主の休泊所として使われた。番所裏手には、川井家の墓所がある。下の写真は番所書院の西面、藩主が通用する際に使用したとされる中門周辺。近くの「立川御殿茶屋」(写真上、第1・第3日曜日のみ営業の「立川そば」は人気のメニューである。

立川御殿茶屋の看板
河又橋 駕籠立休憩所

浦の谷
川奥

立川
至仁尾ヶ内 立川川

川井家墓所
至中央

※本ページの白黒写真は、中西三男編「昭和のおとど白黒写真集」(私家版、2015年)より引用した。

中央



立川の中央部に位置し、**和**、**刈谷**、**三谷**の一の瀬に接する。

中央部の「成川」と、南東部の「中谷」は下名に属すが、西部の「千本」は上名に属す。かつて「菅蒲」、「井手川口」、「細野」、「今屋」、「平野」という小村も存在したが、現在は無人である。集落には現在13戸21人が暮らしている。

明治中期から昭和初期にかけ、立川では度々小学校と分教場の設置や移転、合併があったが、最終的に立川小・中学校が成川に置かれた。人が集まり賑わう場所へと変わっていった中央が、近代以後、立川の中心地となった。



天神宮(上名郷社)の神事面



制作年代は未詳。天神宮の神職をつとめた宮川家に伝わったもの。左から3番目の鬼面は、神社の遷宮の際に、先頭を飾った面という。この面以外の6面には、裏に「宮」の墨銘がある。

中央の文化財

中央では、阿弥陀堂・天神宮・後八幡宮・聖神社等に文化財が伝わる。上名の郷社である天神宮には、神鏡・神事用具・棟札等が伝わるが、とりわけ注目されるのは、同宮の神職をつとめた宮川家に伝わる七面の神事面である。宮川家では旧正月9日に「面のまつり」とい

て、これらの面を床の間に並べ、供え物をしていたという。天神宮に関わる文化財はいずれも上名の文化財といえよう。一方、千本の阿弥陀堂には棟札が多く伝わる。その内の一つ、宝永7年(1710)の阿弥陀如来像再興の棟札は、現存する本尊、木造阿弥陀如来立像を造立した際のもので、京都の大仏師 福田院卓が豊楽寺において本像を造立したことが知られる。

- 中央の主な文化財**
- 阿弥陀堂建立棟札
江戸時代 承応元年(1652) / 阿弥陀堂
 - 木造阿弥陀如来立像
江戸時代 宝永7年(1710) / 阿弥陀堂
 - 神事面 鬼・老人・男・女
江戸時代 / 個人像
 - 八幡宮新建立棟札
江戸時代 元和7年(1621) / 天神宮
 - 建立日記板書
江戸時代 天保11年(1840) / 天神宮
 - 後野権現宮新建立棟札
江戸時代 寛延3年(1750) / 天神宮(後八幡宮)
 - 地主八幡宮建立木札
明治時代 明治10年(1877) / 聖神社
 - 参勤交代道の常夜燈
江戸時代 天保7年(1836)

天神宮の棟札

写真左から、元和7年(1621)の八幡宮新建立棟札、貞享3年(1686)の天神八幡両社新造立棟札、寛延3年(1750)の天神宮八幡宮拝殿鳥居再興棟札、宝暦3年(1753)の八幡宮天神宮本社拜殿上葺棟札。

天神宮の建立日記板書



天保11年(1840)千本村年寄勇蔵以下、上名内各集落の寄進者名を記す。

木造

阿弥陀如来立像

地域八十八カ所の仏像と思われるものもある。三谷集落の八十八カ所仏が広がっているものか。

路傍の石仏



参勤交代道の常夜燈

天保7年(1836)、施主利右衛門、今屋・平野二ヶ村惣中の銘あり。



聖神社

中谷の氏神。成立年代は未詳。明治初年から昭和20年代までの棟札、御幣が伝わる。



城之尾之城跡

戦国時代、川井勘解由の居城があったとされる。



星神社

成川の氏神。かつて春と秋に例祭を行っていた。成川の境に立てられる結界札には「星神社祈禱防災薬大麻」(写真左)と記されている。



天神宮



下名地のなかに建つ天神宮は、立川上名の郷社である。この神職は宮川家がつとめていたため、同家には多数の神事面が伝来している。

海津見神社



千本の氏神。成立年代などは未詳。大正元年(1912)寄進者の木札や、昭和8年(1933)奉獻の常夜燈平成10年(1998)社殿修復工事寄付者の石碑がある。

阿弥陀堂

正面・側面ともに1間の宝形造。宝永7年(1710)の阿弥陀如来立像や正徳2年(1712)の銘が入った鯛口が残る。

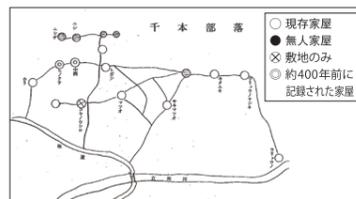


立川小学校の屋号調査

立川小学校では、昭和53年(1978)度から数年に渡り、立川の歴史や文化を調べる活動が行われたが、最初に取り組まれたのが屋号調査であった。調査では、学区内全ての集落で聞き取りを行い、その結果を地図化している。屋号だけでなく人口や世帯数、空き屋の数まで調査されており、当時の集落の規模や数、形状を確認することができる。その他の年度でも、産業や民具、立川御殿や民話に関する調査がなされ、それらの成果は「立川の研究」(昭和58・59年発行)という冊子にまとめられている。過疎高齢化が進行し地域の歴史が失われつつあるなか、児童による調査が重要な記録として残されている。

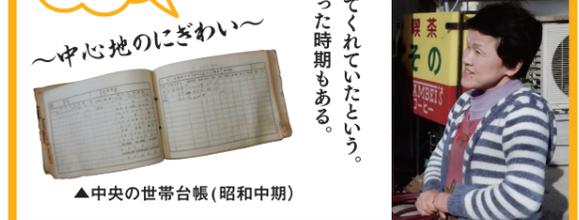


▲立川小学校(昭和中期) 画像:大豊町教育委員会



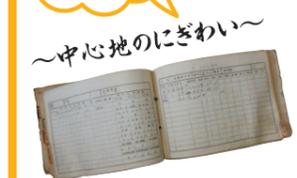
▲千本の屋号 「立川の研究」(大豊町立立川小学校、1983年)より

前野千香子区長(63)の家は成川で旅館と飲食店を営んでいた。小学校があった頃は、運動会があれば大勢の人たちが昼食を食べに来てくれた。山の仕事が増え、山仕事は、愛媛県や徳島県から仕事で来た人がよく立ち寄ってくれていたという。中央が立川のなかで一番活気があった時期もある。しかし今は、中心地であった成川ですら人が減ってしまった。



▲中央の世帯台帳(昭和中期)

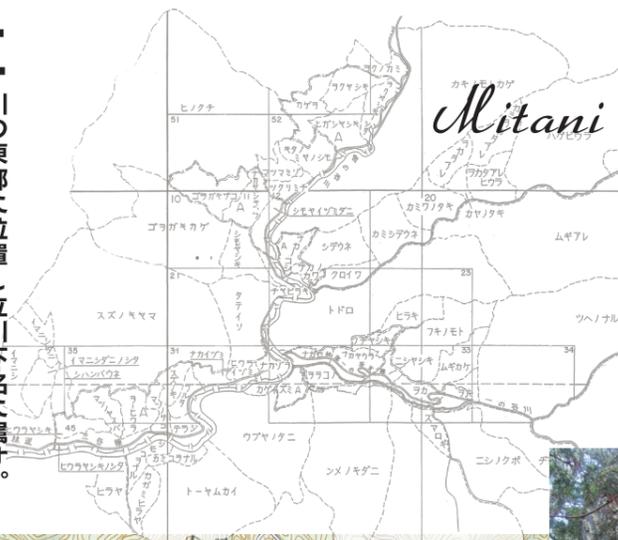
区長の話



▲中央の世帯台帳(昭和中期)

※本ページの白黒写真は、中西三男編「昭和のおと白黒写真集」(私家版、2015年)より引用した。

三谷



立川の東部に位置し立川下名に属す。北東は徳島県、南西は中央に接する。

北部の「**宮の谷**」、東部の「**二の谷**」、西部の「**井手**」をあわせて**三谷**という。宮の谷と二の谷の水を集めて西流する井手川は立川川に合流する。三つの谷に現在28戸36人が暮らししている。

三谷は、三つの小村すべてに御堂と神社が現存することが特徴の一つである。なかでも井手の四社住吉神社は、三谷のほか、刈谷、中央、一の瀬を氏子圏とする下名の郷社である。



四社住吉神社(下名郷社)の神宝類

戦国時代、永正11年(1514)の棟札や天文22年(1553)の曲物をはじめ、神像・神鏡・木器類など多くの文化財が伝わる。写真右手の木箱には神事面が収められており、中央奥の板書には寛文5年(1665)の再興遷宮の様子が記されている。

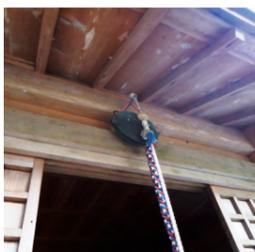
三谷の文化財

下名の郷社である四社住吉神社に伝わる一群の神宝類は、立川の文化財の中でも、ひときわ注目される。中でも、戦国時代の棟札と曲物は、県内でも残存例が少なく、貴重である。永正11年(1514)の棟札は、佐伯氏が納めたもので、「上棟住吉四所大明神」と表書されており、四社住吉神社の創建に関わる可能性がある。また、天文22年(1553)の曲物も、同じく佐伯氏が同社に納めたもので、佐伯氏の繁栄を祈願したものである。

佐伯氏については、高岡郡あるいは伊予国での活動が知られる佐伯氏との関係など、不明な点が多いが、16世紀前半から半ばにかけて、四社住吉神社の「大檀那」として同社の創建・整備に深く関与した地域の有力者であったと思われる。棟札と曲物から、戦国時代の立川の新たな一面が浮かび上がってくる。

三谷の主な文化財

- 木造不動明王立像・毘沙門天立像
室町時代 / 阿弥陀堂
- 阿弥陀堂新再興棟札
江戸時代 享保20年(1735) / 阿弥陀堂
- 石造阿弥陀如来坐像
江戸時代 / 阿弥陀堂
- 住吉四所大明神上棟棟札
戦国時代 永正11年(1514) / 四社住吉神社
- 住吉大明神曲物
戦国時代 天文22年(1553) / 四社住吉神社
- 再興遷宮板書
江戸時代 寛文5年(1665) / 四社住吉神社
- 神事面 鬼・老人・男・女・ウソ吹き
江戸時代 寛文7年(1667) / 四社住吉神社
- 鯛口
江戸時代 享保19年(1734) / 大師堂



大師堂の鯛口
直径21cm。
享保19年(1734)下名の川井仁左衛門が奉掛している。



路傍の墓石
宮の谷にある墓石。天明5年(1785)の銘がある。

阿弥陀堂の木造不動明王立像(右)と毘沙門天立像(左)



ともに檜の一木造で、室町時代の作。像高約74cm。



四社住吉神社(下名郷社)の神事面

中段左端の鬼面裏に寛文7年(1667)の刻銘がある。これらの仮面は、数十年に一度の遷宮の際に使われたのではないかと伝承されている。



大師堂
正面・側面ともに1間の宝形造。背後に巨大な岩壁がそびえる。お祭りは弘法大師の入定日とされる3月21日(旧暦)。



海津見神社
一の谷の氏神。小字「ヲカ」に建つことから「ヲカノ宮」とも呼ばれる。現在旧暦6月に例祭が行われている。

四社住吉神社
立川下名の郷社。以前は正月神事として百手の射礼が行われていた。神宝、棟札などさまざまな文化財が伝わる。写真は昭和43年(1968)撮影のもの。



阿弥陀堂
正面・側面ともに3間の宝形造。江戸時代後期の会日は正月11日で堂地は3代2歩(約66m)。



吉岡城跡
よしおかじょうあと
戦国時代、川井丹後の居城と伝わる。

三崎神社
みさきじんじや
宮の谷の氏神。『土佐州郡志』(18世紀初)によると、年に5日間お祭りをしていた。鳥居をくぐると明治23年(1890)に宮の谷の川井氏が奉献した狛犬が建つ。

ツエナシシ堂
六角形式の御堂。設立年代などは未詳だが、堂内には石仏、木仏などがあり、この御堂の傍らには地域八十八ヶ所とみられる石仏が残る。

地域八十八ヶ所

トピックス

四国八十八ヶ所霊場を模し、ある地域の範囲内に作られた「地域八十八ヶ所」(ミナハチヤケ所)が三谷にある。これは集落に置かれた1から88までの番号が刻まれた仏像の総称で、八十八ヶ所を全て巡拝することで結願成就となる信仰である。古来によると、大正時代頃に置かれたもので、集落の誰かが病になった際、住民数名が集まってミナハチヤケ所をまわっていたという。三谷の住民だけでなく、立川のほかの集落からも巡拝に訪れた人がいたそうである。仏像は三谷の御堂や路傍などで確認することができる。そのほか三谷と隣接する地域でも同様の像が数カ所で見られる。これらの仏像も三谷の地域八十八ヶ所の一部であると思われる。



区長の話

～村の産業～



立川地区長を兼任されている高橋邦寿区長(73)に大師堂までご案内いただいた。その道中、гентウ岩なる巨石の上で休憩をとった。この巨石は、広く平らで日光がよく照ることから、三極をへぐって(皮を剥いで)アク抜きしたものを、乾燥させていた場所だという。

昭和40年代頃までは、紙幣の原料である三極の栽培が盛んで、住民の主要な現金収入であった。当時は「三極講」という相互援助の制度も存在した。約50年前、三極が縁で東京の造幣局に就職した若者もいたという。

※本ページの白黒写真は、中西三男編「昭和のおとど白黒写真集」(私家版、2015年)より引用した。

一の瀬

Ichinose

立川の最南部に位置し、北は中央に、南は川口地区に接する。

南部の「一の瀬」と、北部の「柳瀬」をあわせて一の瀬の集落が形成されている。そのほか「馬船」「東谷」という小村も存在したが現在は無人である。集落には現在19戸39人が暮らしている。

集落は昭和16年(1941)の国民学校令により、隣村の川口小学校の学区となつて以来、行政区画では川口地区に属す。行政的には立川地区から切り離されているが、多くの住民にとっては立川への帰属意識が根強く残っている。



海津見神社
もとは中央集落の中谷の氏神であったが、現在は一の瀬集落が管理をしている。かつてはここで雨乞いを行っていたという。



郷士本山家屋敷跡
上名村番人庄屋の分家である郷士本山家は、4代目八郎右衛門の時代以降、柳瀬に住んだ。同家は柳瀬の渡しの番役を勤めていた。



六地藏
県道拡張に伴って昭和61年(1986)に現在の地に立てられた。集落の南端にあたるこの辺りの小字を「六地藏」という。六地藏が実際に今立っているのは一体である。



一瀬川
林業がさかんな立川地区では、かつて立川川を利用して材木を流し、一の瀬で陸あげしていたといわれる。



参道より高知自動車道
(川の江方面をのぞむ)
平成4年(1992)、古代以来の北山官道に沿う道筋で大豊・川之江間が開通。これにより交通の利便性は向上したが、集落の風景も大きく変化した。



一瀬神社
一の瀬の氏神。成立年代などは未詳だが、江戸時代中期以降の棟札や神宝の鏡など、多くの文化財が伝わる。



八坂神社の板書
大正15年(1926)旧9月、神社の鳥居を建て替えた際の寄附者の芳名を記す。金3円寄附の水野亀之助以下、79名の名前が見える。川口在住者の名前も見える。



八坂神社の神宝類
写真左から神鏡、鏡、鎌類、鏝。
神鏡は全部で7面あり、藤原光長と光政の銘がある。神鏡と鏝は年代未詳であるが、左から3番目の鏝は墨書から正徳5年(1715)奉納のものと思われる。

区長の話
吉川寛士区長(67)は、父親の代より引き継いだ下名郷社の総代を務めている。下名分の刈谷、中央、三谷に在る総代を束ねるのが総総代である。区長の家では、三谷の四社住吉神社以外にも、八坂神社と海津見神社の管理や祭りの世話をしている。一の瀬集落の氏神を祀る八坂神社は自然であるが、海津見神社はそもそも中央集落の中谷の氏神だといふ。過疎高齢化が原因で、近年集落を越えて管理を譲渡されたのである。「いよいよ立川には人がいなくなってしまう。」と区長は人口減を憂う。

一の瀬の文化財
一の瀬では、八坂神社と海津見神社に文化財が伝わる。
八坂神社にある正徳5年(1715)11月の棟札は、中谷の七郎兵衛ら3人が「本願人」となり、豊楽寺の賢者が導師を勤めて、聖宮を「新建立」した際のものである。八坂神社には、「正徳5年未ノ十二月吉日」の墨書のある鏡も伝わっており、恐らくこの鏡は、聖宮の建立直後に奉納されたものと推測される。
さて、立川には江戸時代の棟札が多く伝わるが、その内の何点か

は、豊楽寺の僧侶が導師を勤めた際のものである。江戸時代、立川上名村・下名村は、本山郷に属す村々であったが、寺院や神社といった宗教面では、豊永郷に所在した豊楽寺の支配を受けていた。現在でも立川に豊楽寺所管の御堂が多いのはそのためである。

- 一の瀬の主な文化財**
- 聖宮新建立棟札 江戸時代 正徳5年(1715) / 八坂神社
 - 神宝 鏡 江戸時代 正徳5年(1715) / 八坂神社
 - 地主権現宮造建棟札 江戸時代 享保8年(1723) / 八坂神社
 - 神鏡 銘藤原光長・光政 江戸時代カ / 八坂神社
 - 鳥居立替寄附者芳名板書 大正時代 大正15年(1926) / 八坂神社
 - 渡津見大神奉祭木札 明治時代 明治30年(1897) / 海津見神社
 - 海津見神社本殿新再建棟札 大正時代 大正8年(1919) / 海津見神社

一の瀬と川口の集落境にある境界札
集落の境には「諸災防禦」の八坂神社の折橋札が立てられている。

柳瀬の吊り橋
トビックス
柳瀬には、昭和35年(1960)頃に架けられた仁井田橋という吊り橋がある。橋が架かる場所は江戸時代、参勤交代時に立川川を下名村から上名村に渡っていた地点であり、その折には仮設の板橋が架けられていた。その後、複数の丸太を繋いだ木橋が架けられるようになったが、台風や大雨の度に流さなければならなかった。集落ではこの不便を解消すべく、寄付を募り鉄製の橋を架けたのである。橋は通常、行政によって造られることがほとんどであるが、柳瀬の吊り橋は「集落の橋」である。現在では寄付を募ることはほとんどなくなったが、昔は神社の修繕や道普請など、集落としての活動の際にはよく寄付を集めていたという。



▲集会所に保管される寄附者芳名